

【資料】

心理臨床家を志した当初の動機と現在の動機に関する質的分析

金 沢 吉 展（明治学院大学心理学部）

岩 壁 茂（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

要 約

日本の心理臨床家が臨床家を志した当初の動機および現在臨床業務に取り組む動機について、日本語版「心理臨床家の成長に関する調査票」(DPCCQ-J)の自由記述回答を基に検討した。「臨床家になる元来の動機や理由とその動機をもった時期」に対する 116 名の回答と「現在心理臨床業務を行う動機」に対する 115 名の回答を、グラウンデッド・セオリー法と合議的質的研究法に基づく質的分析法により分析した。当初の動機としては、他者貢献への意欲が最も多く、次いで、心理学、心理療法、あるいは心の働きに対する知的・職業的好奇心が挙げられた。現在の動機にも他者を援助することへの意欲が最も多く挙げられたが、32.1%の回答は回答者自身にとっての臨床業務の意義について述べたものであった。業務上あるいは経済的な必要性も当初の動機・現在の動機ともに少なからずみられた。臨床家の教育訓練にどのような課題が示唆されるかについて論じた。

キーワード：職業的発達、職業的動機づけ、質的研究

問題と目的

臨床家が示す温かさや関心等、臨床家の個人と関わる要因は、心理療法の効果と関連することがこれまで実証的に示されてきた (Beutler et al, 1994; Orlinsky et al, 1994)。臨床活動を行う動機はこうした個人的要因の一つであり、臨床家の発達や教育訓練においても重要な要因である (Skovholt et al, 1995)。臨床家を志した動機を吟味することは、臨床活動をより良いものにする上でも、臨床家の継続的訓練やセルフケア活動を促すためにも必要である (Baker, 2003; Corey et al, 1998/2004; Sussman, 2007)。

心理臨床家を志す動機に関する研究の多くは、臨床家、およびその家族の抱える心理的問題を指摘している。Racusin ら (1981) は、心理臨床家を対象とした面接から、臨床家の原家

族は心身の問題を抱えることが多く、そのため臨床家は、他者のニーズを満たすような養護的役割を果たすことが多い一方で、原家族に強い憤りと対人関係の親密さに対するアンビバレンスを感じていたと指摘した。そして、臨床家の道を選択することは、親密な関係に対する統制感を強めることによって、その無力感への心理的防衛の役割を果たしていると論じた。臨床家の面接調査を行った Barnett (2007) や、メンタルヘルス領域と他領域の専門家を比較した Elliott ら (1993)、心理臨床家と物理学者とを比較した Fussell ら (1990) も同様の結果を得ている。臨床家は、臨床活動を通して個人的な傷つきを間接的に癒すことを隠れた動機づけとする「傷ついた癒し手 (Wounded Healer: Henry, 1966)」である見方とも重なり、これらの知見は臨床家の動機づけに関する中心的な仮

説となってきた。

一方、上記とは異なる動機を見出した研究もある。Murphyら（1995）は、臨床心理学者と社会心理学者の職業選択に関する動機と、関連する過去の経験に関して質問紙調査を行った。その結果、個人的問題、および問題を抱えた原家族という過去の経験に関する項目について臨床心理学者は有意に高い得点を示したが、これらの事柄が職業選択に重要な影響を与えたとする回答は極めて少数であった。一方、専門的愛他性や個人的成長という動機、および他者との協調という、一見臨床家の動機づけと見られる項目で2群間に有意差は見られなかった。これらの結果からMurphyらは、臨床家が個人的問題を抱えているとする見解はごく少数の者に該当し、大多数の臨床家は肯定的動機も有していると論じている。Norcrossら（1989）は、心理臨床家による自由記述を分析して、これらの臨床家が自由な表現を許された家庭環境で育ち、他者援助への関心を強くもち、偶然の出会いも重要な影響を及ぼしていると述べ、サンプルの選択法により結果が異なると指摘している。

Farberらは、心理臨床家を志す動機に関する研究を総合して、「文化的あるいは社会的に取り残された体験」「子ども時代の辛い体験を耐え抜いている（いわゆる“傷ついた癒し手（Wounded Healer））”」「高度な心理的なものの見方を身につける」「他者の相談者となる」「メンター（指導者・助言者）と出会う」「個人療法を受ける」「他者援助欲求」「他者理解欲求」「自立欲求」「（安全な）親密さへの欲求」「知的刺激欲求」「自己成長と自己治癒の欲求」という12の共通したテーマがあり、一個人の中でも複数の事柄が影響し合っていると論じている（Farber et al, 2005）。

日本では、著名な心理臨床家が臨床の道を志した経緯についての記述が出版されているが（一丸，2002），動機についての実証的研究は少ない。学部学生を対象とした質問紙調査では、

カウンセラー志望者には、いじめられ体験のある学生が非志望者よりも有意に多いことが示されたが（渡部ら，2001），いじめられ体験を有しなくとも志望する学生がいることから、他の動機づけもあることが示唆される。上野（2007）は、臨床心理学領域の教員、就業中のカウンセラー、カウンセラー志望大学院生、カウンセラー志望学部生の4群の人々から得られた自由記述回答をKJ法により分析した結果、「欲求充足」「貢献」「就業によるメリット」等のカテゴリーを得ている。興味深いことに、教員群では「欲求充足」が過半数を占めていたが、就業中のカウンセラー群では「就業によるメリット」が最多となり、大学院生と学部生では「貢献」が最多となる等、群によって動機が異なっていた。また、実習経験を有する大学院生の回答からは、実習における困難と動機との関連が見出され、臨床経験も動機づけに影響を与える可能性が示唆された。

心理臨床家を志した動機を理解することの必要性は指摘されているものの、実証的研究は非常に少ない。また、臨床家が現在も臨床業務を行い続けていることにはどのような動機や理由があるのかについてはほとんど研究が行われていない。臨床家の発達に関する研究からは、志した動機の内容とその強さは、臨床家が臨床職にとどまるかどうかを含めて、臨床家の生涯発達に影響を与える要因の一つであると言われている（Skovholt et al, 1995）。したがって、臨床家として成長感をもち、業務にやり甲斐をもち続けるためにはどのような動機が関連しているのか明らかにすることは意義があると考えられる。加えて、心理臨床家を巡る社会的状況や教育訓練が異なる日本では、海外とは異なる知見が得られる可能性が考えられる。そこで本研究は、海外との比較を行う上での基礎的な資料を得るため、日本の心理臨床家が臨床業務を志した動機と時期、ならびに現在臨床活動を継続している動機について、探索的に調査することを目的とした。なお、臨床活動を志す動機と

して、これまでの実証的な研究では、無意識的な欲求から職業選択に影響を与えた要因まで広く取り上げられており、研究方法も、特定の臨床家を対象としたインタビュー調査から多くの人々を対象とする質問紙調査まで様々な方法が用いられている。そこで、臨床家を目指すきっかけとなる要因を広く探索するため、本研究においては自由記述調査を用い、「動機」を「進路選択・維持に影響を与えた要因や理由」を意味するものとして用いることとした。

方法

1. 調査用紙

心理臨床家の職業的発達および心理療法実践の国際比較を行うために作成された調査用紙 (DPCCQ: Development of Psychotherapists Common Core Questionnaire: Orlinsky et al, 2005) の日本版 DPCCQ-J (金沢・岩壁, 2006) に含まれている、臨床家を志した元来の動機に関する項目「あなたが臨床家になろうとした、元来の動機や理由は何ですか。また、それはいつごろのことですか。」および、現在臨床業務を行う動機に関する項目「現在、あなたが心理臨床業務を行う動機はどのようなことですか。」の自由記述 2 項目への回答を分析対象とした。

2. 対象および手続き

日本における臨床心理学領域の主要団体である日本心理臨床学会の会員を対象として無記名による調査を行った。配布の際は、学会員の多様な実態を反映させることができるよう、複数の方法を用いた。まず「日本心理臨床学会会員名簿 (2003 年度版)」(日本心理臨床学会, 2003) 記載の正会員から 300 名を無作為抽出し、調査依頼状、DPCCQ-J、切手貼付済み返信用封筒、謝礼を同封のうえ 2006 年 2 月中旬に郵送した。2006 年 3 月末日までに 112 通の回答を得た (回収率 37.33%)。次に、研究者 2 名が、2006 年 4 月から 2007 年 1 月に縁

故法により国内の心理臨床家に調査票 150 部を雪だるま式に配布 (snowball sampling) し、2007 年 1 月までに 45 通の回答を得た (回収率 30.00%)。最後に、2007 年 9 月の日本心理臨床学会大会会場にて、調査参加希望者 11 名に上記と同様の調査票を直接手渡した。うち、2008 年 3 月末までに 3 通の回答が得られた (回収率 27.27%)。以上により、合計 160 通の回答 (回収率 34.71%) が得られた。

これら 160 通の回答のうち、元来の動機や理由を尋ねる項目に対する有効回答は 116 通 (全回答者に対する有効回答率 72.50%) であった。内訳は、女性 84 名・男性 32 名、平均年齢 40.75 歳 (範囲: 25 ~ 69, SD : 12.07), 最終学歴は学士 27 名, 修士 69 名, 博士 10 名, 不明 10 名, 臨床経験年数は平均 12.58 年 (範囲: 0 ~ 43, SD : 10.10) であった。現在の動機に関する項目への有効回答は 115 通 (全回答者に対する有効回答率 71.88%) であり、そのうち「現在心理臨床業務を行っていない」と回答した 4 名を除いた 111 名の回答を分析の対象とした。内訳は、女性 81 名・男性 30 名、平均年齢 40.84 歳 (範囲: 25 ~ 69, SD : 12.34), 最終学歴は学士 27 名, 修士 65 名, 博士 10 名, 不明 9 名, 臨床経験年数は平均 13.15 年 (範囲: 1 ~ 43, SD : 10.27) であった。

3. データ分析

回答はグラウンデッド・セオリー法 (Strauss et al, 1998/2004) と合議的質的研究法 (Hill et al, 1997) に基づいた質的データ分析法を用いてカテゴリー化した。まず、自由記述データを特定の心理的テーマや出来事を反映する意味の単位に区切り、意味の単位に記述的コードをつけた。次に、コード間の類似性からカテゴリーを生成した。分析プロセスには 4 人の分析者が関わった。まず、第二著者に質的分析法の訓練を受けた 2 名の分析補助者 (大学院生・研究生各 1 名) がそれぞれ別々に自由記述回答の暫定的なコード化とカテゴリー生成を行った。デー

タ分析の初期段階では、第二著者と分析者2名が定期的に合議ミーティングを行い、自由記述データの意味がコードに反映されているか検討した。カテゴリー生成終了後、研究者2名がカテゴリーとコードと自由記述データを照らし合わせて必要に応じてカテゴリーを修正し、一貫した方法でカテゴリーが作られているか確認した。

結果

1. 心理臨床家を志した当初の動機と時期

回答は計175の意味単位に分けられ、コード

化の後、15のカテゴリーに分類された。これらをさらに統合して、最終的に4つの上位カテゴリーを得た（Table 1）。最多は「他者貢献への意欲」であり、自身が問題を抱えていたことや身近な他者の問題に接した体験を基にした援助意欲、臨床家に直接出会うことによる臨床家としての将来像の獲得、自身の被援助体験、周囲の友人等を助ける援助体験が中心にあった。援助の失敗体験もこのカテゴリーに含めた。援助体験の有無に関わらず、他者と関わりたい、他者援助を行いたいという接触と援助の欲求も多くみられた。

心の世界や心理療法という営みに関する興味

Table 1 心理臨床家を志した当初の動機

上位カテゴリー	下位カテゴリー	回答例
他者貢献への意欲 (99) 56.6%	悩み・傷つき体験 (22)	中学生の頃いじめられた。誰にも相談できなくてつらかった。だから、スクールカウンセラーになりたいと思った。／自分の神経症的傾向
	心理的問題をもった人との出会い (15)	高校の時、摂食障害、盗癖のある友人がいたこと／私が25才で教員3年め担当していた子に不登校児がいた。
	現場・実習体験を通じて関心を抱いた (10)	障害児者の療育活動に出会い、専門的に勉強したいと思いました。／大学3年の児童相談所での活動。一緒に活動する中で、心を開いてくれた過程が嬉しかったから。
	臨床家との接触を通じて臨床の道に惹かれた (9)	大学の臨床家である教授の講義を受けて、その先生の人間観や臨床の実践に強く魅かれて職業として意識した。／大学に入ってから、臨床家である恩師に出会い、その仕事に感銘を受けたため。
	援助できないことへの無力感 (5)	養護教諭でいた時に、教育のみの限界を感じる被虐待児で非行の生徒と出あったこと／大学生の頃、友人が精神疾患となったことから、興味をもった。(何も自分にできなかったということで歯がゆい思いをしたことを覚えています。)
	自分自身が援助を受けた体験 (3)	私自身が問題を抱えカウンセリングを受けたことが理由である。／中2の時、自身が友人関係のことで悩み、保健室の先生に相談し助けてもらい、大人になったら、自分も思春期の子どもの心の問題を扱う職につきたいと思いました。
	他者貢献の欲求 (26)	17～18歳のころ、将来人の役に立つ仕事をしたいと思い、心理臨床の仕事に興味を持った。／悩んでいる人を援助したため。
知的・職業的な興味 (67) 38.3%	他者と関わることへの欲求 (9)	中学時代に人と関わる仕事をしたいと思っていたように思う。／子育てをするうちに、人と直接かかわる仕事をしたいと思ったから。
	心への関心 (34)	人の心の働きの不思議さには興味がありました。／中学生の頃から、自分や人の心の動きに関心をもち始め、「心理学」に興味を持ち、大学で学ぼうと思った。
	自己理解への欲求 (6)	高校、大学の頃、もっと自分自身を知りたいと思ったから。／思春期から自分自身に対する興味があった。
	心理療法への関心 (2)	高校2年で子どもを対象とした絵画療法の記事を読み興味を持った。／身体を使った心理療法に興味を持ち、イギリスでダンスセラピストの資格を取得しました。
	心理職・臨床業務への憧れ・関心 (14)	漠然と憧れがあった (高校3年生)。／小学生の頃、新聞の悩み相談の欄を読んで、こういう仕事をしたいと思った。
消極的理由 (6) 3.4%	自己の特性・能力を発揮できると感じて (11)	自分の性格に向いていると考えたこと。／大学で学んだ心理を生かす仕事につきたいと思っていた。
	消極的理由 (6)	特に動機はなく、気づいたらなっていた。／就活にいきづまり、大学院に途中で進路変更し、結局そのまま周りと足なみを揃えた、といったモラトリアムな理由
現実的必要性 (3) 1.7%	現実的必要性 (3)	高校教員になり、教育相談担当になったから。／20才の頃、家庭教師がクビになり経済的に困った。その日、大学のコンパで偶然にとなりすわった大学教官から明日から心療内科へ来いといわれていってみたら、すぐ心理テストとカウンセリングを患者さんにさせられた。

注：カッコ内の数字は人数である。

や、自己の内面に対する探求心も広く見られた。その一方、心理職への憧れと、自己の特性を発揮したいという、職業的興味も得られた。これらの回答は、自分自身を知り、高めていくことを主眼とした自己への関心が顕著なテーマとなっているため、「知的・職業的な興味」として分類した。

職務上の必要性や自身の経済的困難からの打開策として臨床家の職を得たとする回答も見られ、「現実的必要性」と分類した。

これら以外に、明確な理由付けが記載されない回答も見られ、「消極的理由」と分類した。

志した時期について得られた115名の回答を研究者2名が分類したところ、人数の多い順に、①大学生期 (N=36, 31.30%)、②高校生期 (N=29, 25.22%)、③就職後 (N=14, 12.17%)、④中学生期 (N=11, 9.57%)、⑤小学生期 (N=9, 7.83%)、⑥大学院生期 (N=6, 5.22%)、⑦20代後半以降 (N=4, 3.48%)、⑧時期不明確 (N=3, 2.61%)、以下、「思春期」「大学受験浪人中」「大

学院修了後」が1名ずつ (各0.87%) と続いた。

2. 現在心理臨床業務を行う動機

回答は165の意味の単位に分けられたあと、14の下位カテゴリーに分類された (Table 2)。他者援助への強い意欲や他者の成長・ウェルビーイング促進の一助となることへの喜び、あるいは、他者に必要とされることや後進の育成といった、「他者のために援助を行うことへの意欲」が半数近くを占めた。

一方、自己の成長に寄与しているとの記述や、自身の持つ関心が満たされること、臨床業務が自身にとってのやり甲斐やアイデンティティとなり、魅力を感じている等の回答から、臨床業務を行うこと自体が臨床家自身にとって大切な側面を有していることが示された。さらに、自己の特徴を認識してそれを高めていくことへの意欲も述べられている。自己にとっての意味づけを中心としたこれらの回答は、「自身にとっての重要な意義」としてまとめられ、得られた

Table 2 現在心理臨床業務を行う動機

上位カテゴリー	下位カテゴリー	回答例
他者のために援助を行うことへの意欲 (79) 47.9%	他者とかかわりながら援助していくことへの意欲 (43)	もっと笑顔でいられる人が増えたらいい。どうせ仕事をするなら、それに少しでも関係することに携わりたい。／援助を必要としている人に対し、自分のベストを尽くしたいため。
	他者に関わることから得られる喜び・充実感 (23)	クライアントの成長をクライアントと共に喜ぶことが何よりもうれしいから。／少しの介入で、幼児だけでなく親も変化していく場面に立ち会え、人が変化していく力、を実感できるから
	他者のニーズに応える (11)	自分を必要としてくれるクライアントや職場の存在／クライアントがまっくれているから。
	後進を育成する (2)	今の動機は、本当の旧来の心理療法を若い方々へ伝えるだけです。
自身にとっての重要な意義 (53) 32.1%	成長感を得たい (14)	私個人の成長にも役立っている／自分自身の苦しみを軽くするため。
	人間理解への関心を満足させる (10)	人間の複雑な心理過程について知りたい。どう関るかによって人が変化することを追及したい。／自分がどこまで深い世界を知ることができるか、という好奇心。
	自分自身のありようの重要な部分 (8)	すでに自分のアイデンティティを構築するものとなっている。／私自身が生きていくための精神的な支えとなっている。
	自身にとっての魅力を感じる (5)	人の話をきき、解決を『一緒に』考えるこの仕事に、なぜか魅かれる思いがします。／スーパービジョンを受けてから 心理療法の魅力を感じる。
	やり甲斐を感じる (4)	それなりにやりがいがあるから／仕事自体のやりがい。
	自身の専門性の向上を図る (9)	専門家のスキルを身につけるため。／自分のもつものを活かしていきたいという気もち
	適性の認識 (3)	自分にむいている分野だという気持も、もちろんあります。
現実的必要性 (28) 16.9%	経済的理由 (17)	生活の糧、つまり生きていくために必要な収入を得るため／金銭を得るという事。
	業務として行っている (11)	仕事だから。／必要上、自分の今までの仕事の延長として。
消極的な継続 (5) 3.0%	消極的な継続 (5)	正直、よく判らない。／現在、動機を見失いつつあります。

注：カッコ内の数字は人数である。

回答全体の約3分の1を占めた。

経済的な理由や仕事上の必要性を述べた回答は「現実的必要性」と分類した。最後に、臨床活動への意欲が失われた状態を示す回答もあり、「消極的な継続」としてまとめられた。

考察

1. 心理臨床家を志した動機・理由について

116名から175の意味単位が作られたことから、心理臨床家を志す動機は一人の臨床家の中に複数存在する可能性が示された。最多の回答（Table 1）は「他者貢献への意欲」であり、他者への貢献が心理臨床家を目指す最も中心的な動機であることが示唆された。臨床家を志した時期と併せて考えると、特に思春期から青年期において、他者との関係の中で、つながる、傷つく、助ける、助けられる、無力感を抱くという感情的体験が臨床家の道へ進もうとする意志と密接に結びついていると考えられた。

「他者貢献への意欲」には、過去の体験や、身近な人たちの経験や出来事、それらの体験を通じて臨床家が抱いた感情や欲求、不全感等が含まれており、先行研究（Barnett, 2007; Elliott et al, 1993; Farber et al, 2005; Fussell et al, 1990; Murphy et al, 1995; Racusin et al, 1981）と共通する。しかし、他者との接触や対人援助に対する意欲や関心、さらには臨床家との偶然の出会いも含まれており、過去の傷つきや悩みの解決が中心であるとは限らない（Norcross & Guy, 1989）ことも示された。

「知的・職業的な興味」は、個人的な問題を契機とした自己への関心や自己愛的動機（たとえば Barnett, 2007）よりもむしろ、心への探求心や自己理解への欲求、知的な関心や職業としての関心が中心であった。職業的な興味が見られることは先行研究（Murphy et al, 1995）でも示唆されている。

「現実的必要性」は Murphy らの指摘する経済的安定への欲求に相当すると考えられるが、

後述するように、日本の臨床家を取り巻く経済的状况が必ずしも十分ではないにもかかわらず心理臨床家の職に就く背景にはどのような事柄が影響しているのか、探ることは有益と思われる。

最後に、「消極的理由」はこれまでの先行研究では指摘されていない動機である。臨床活動を行う動機は臨床実践においてだけではなく（Corey et al, 1998/2004; 上野, 2007）、臨床家の発達や教育訓練においても重要な要因の一つである（Hogan, 1964; Skovholt et al, 1995）ことをふまえると、消極的な動機を有する臨床家がどのような臨床実践を行っているのか、臨床家としての発達や教育訓練の上で他の臨床家と違いがあるのか、探っていく価値がある。

2. 現在心理臨床業務を行う動機

111名の回答から165の意味の単位が得られたことから、一人の臨床家にとって現在の動機も単一ではないことが示唆された。臨床業務に積極的に関わり、他者の福祉に貢献することに対する強い意欲（「他者のために援助を行うことへの意欲」）が全体の半数近くを占め、中心的な動機と言える（Table 2）。

「自身にとっての重要な意義」からは、臨床家が自身の専門性を高めるだけではなく、人間としての自己の変化・成長に対しても積極的な関心を抱いていることが示された。また、臨床業務を続けることは臨床家にとって単なる「仕事」ととどまらず、自分自身にとっての誇りや存在感の礎となっていることも示唆された。

「現実的必要性」は、生計の維持と業務上の必要性を中心とする動機であり、現実的な必要性を背景とした動機と言える。

「消極的な継続」には、臨床業務を行う理由を見失っているという記述が含まれており、全体の3%を占めている。北米での調査（Norcross et al, 1993, 2002）では、20%近くの心理臨床家が、人生をやり直すなら心理職や援助職以外の分野が良いと答え、12%の回答者は5年先

に職業を変えることを考えていると回答しており、本研究の結果が特異ではないとも考えられる。しかし、消極的な動機を有しながら臨床職にとどまり続けている背景にはどのような要因が関連しているのか、動機を見失っていることが臨床業務にどのような影響を与えているのか、見失うことは一過性の現象なのかそれとも長期的なものなのか、検討する必要がある。

3. 心理臨床家を志した当初の動機と現在臨床業務を行う動機との比較

当初の動機と現在の動機はどちらも、他者に向かう動機（「他者貢献への意欲」「他者のために援助を行うことへの意欲」）、自己に向かう動機（「知的・職業的な興味」「自身にとっての重要な意義」）、生活や業務の必要から生じる動機（「現実的必要性」）、および消極的な動機（「消極的理由」「消極的な継続」）の3つにまとめることができた。また、当初・現在共に、臨床家の動機を中心は積極的で意欲的なものであり、かつ、他者に向かう動機が最も多いことが示唆された。このことは、対人援助職としてむしろ当然のことと言えよう。一方、当初は、自身の傷つき体験や無力感といったネガティブな体験に触発された動機や、他者と関わることへの欲求が見られるが、現在の動機にはそうした記述は見られない。臨床家の業務には困難な事柄も多いにもかかわらず、臨床業務を続ける動機に、他者を援助することについての喜びや充実感がみられることから、臨床家が積極的に業務に携わり続けようとする意欲が感じられる。

志した当初も現在も、自分自身の興味関心は主要な動機の一つであるが、当初の動機が自身の中から沸き上がる欲求や関心であるのに対して、現在の動機は、自身を高める、また自身を支えるものとしての臨床活動という記述が多い。このことは、臨床業務を経験することにより、臨床家としての自己をアイデンティティの中に取り入れ、それをさらに発展させようとする意欲が臨床家の中に育っていくプロセスを想

像させる。

当初の動機には心理学や心理療法への関心が含まれているが、現在の動機には含まれていなかった。これは、臨床家の発達について、当初の心理療法に限定された関心から、人間そのものへの関心へと臨床家の興味が広がっていくとする Skovholt らの知見（Skovholt et al, 1992, 1995）と符合する。

生活や業務の必要性から生じる動機は、当初の1.7%から16.9%へと増加している。臨床家が経済的理由や業務として臨床活動を行う必要にも迫られているという結果は、実年齢や経験年数が上がるにつれて、仕事と生活の両面において、臨床家を志した当初とは異なる状況におかれていることが想像される。上野（2007）においても、就業中のカウンセラー群では「就業によるメリット」が最多の動機としてあげられていることから、臨床家自身のライフサイクルが臨床活動を行う動機に影響を与えている可能性（Skovholt et al, 1992, 1995）が考えられる。

消極的な理由は、当初も現在も全体の3%程度挙げられている。現在の動機として、動機を見失っているとする回答が現れていることは注目される。この結果については、日本の心理臨床家をとりまく経済的状況が必ずしも好ましくないという実態（大山, 2010）を反映している可能性も考えられる。仕事に対する意識が給与や就労条件と密接に結びついていることから、臨床家の成長や効果的な関わりを高めるためには、臨床家を取り巻く環境的整備も重要な課題となろう。

以上の結果からは、いわゆる“傷ついた癒し手（Wounded Healer）”（Henry, 1966）を中心とする見解とは異なり、むしろ、Farber らが論じるように（Farber et al, 2005）、多様な動機が背景となっていると考えられる。Farber らが挙げる「文化的あるいは社会的に取り残されているという体験」以外がすべて含まれている一方で、海外の研究では指摘されていない消極的な動機が含まれていた。この2点の違いの

背景としては、心理臨床家および臨床心理職を巡る社会的な要因の存在を考えることができよう。

本研究の問題点と今後の課題

志望動機に関する回答は回顧的データであることから、回答者の記憶の歪みや、現在の自身の状況が記述に影響を与えた可能性、また、社会的望ましさが作用した可能性も否定できない。

本研究ではカテゴリと回答者の年齢や臨床経験とのつながりは検討していない。臨床心理士をとりまく教育・訓練制度および就業状況が大きく変わりつつある今日、臨床家を目指す動機に関して世代による違いがあることも考えられる。本研究から得られた結果は、臨床実践をとりまく環境が異なる北米における先行研究とも一致する部分があり、臨床家の動機の基本的部分を捉えている一面もあるが、一方で、臨床心理職を巡る社会的・経済的状況が影響していると想像される部分もあると考えられ、国によって臨床家の動機が異なる可能性を示唆している。今後は、臨床家の経験年数等の変数と動機との関連に関する調査や、他国におけるDPCCQの結果と比較する国際的な研究も有意義と考えられる。

自由記述調査による限界も考えられる。自由記述では回答が短くなりがちで、意味の解釈が困難な記述も少なくなく、協力者によって記述量にもかなり違いがあった。回答には、調査への動機づけの高い人の回答が多く反映されている可能性もある。調査方法やサンプルの選択によって結果が異なるとの指摘（Farber et al, 2005; Norcross et al, 1989; 上野, 2007）や、自由記述には意識レベルに上りやすい回答が記載される一方で無意識的な動機は記載されにくいことを考えると、動機づけの高い臨床家と消極的な動機を有する臨床家を面接法を用いて比較する等の方法を用いることにより、本研究と

は異なる視点を得ることも可能となろう。さらには、臨床心理学に対する当初の動機がその後どのように変化していくのか、個人の文脈の中で動機づけの変化と関わる体験や要因を浮き彫りにすることのできる縦断的な研究も有用である。

本研究は、質問紙により多人数の回答を得て、日本の心理臨床家の動機の全体像を探索的に把握することを狙いとした基礎的な調査と位置づけられる。細かな動機や成長感の展開を描き出すことや、数量的データをもとに動機の構造や臨床経験との関連を探る等、より複雑な研究は今後の課題と言える。

心理臨床家の動機が、臨床実践への取り組み方や実践で感じられる困難と関連があるとの指摘（Corey et al, 1998/2004; 上野, 2007）をもとに考えると、本研究で示された動機が臨床活動にどのような影響を与えているのか、臨床家の抱える困難やストレスへの対処とはどのように関わるのか、臨床家が特に吟味すべき動機とは何か等、探っていくことは重要と考える。さらには、臨床家自身の業務・生活の状況や個人としての発達段階と動機との相互の関連性を調べることにより、心理臨床家の教育・訓練に資することのできる示唆が得られよう。

本研究から、心理臨床家にとって、他者への関心のみならず自己への関心も重要な動機であることが示唆された。自己への関心をどのように生かして、有能な臨床家を育てていくことができるのか、検討することは重要な課題と言える。

付記

調査にご回答を戴いた方々、ならびに、調査用紙の作成とデータ分析にご助力戴いたお茶の水女子大学および明治学院大学の研究生・大学院生の皆さんに感謝申し上げます。本研究の一部は日本心理臨床学会第26回および第27回大会において発表された。ご質問・ご意見等をいただいた先生方に感謝申し上げます。本研究は、

明治学院大学心理学部付属研究所 2005 年度～2006 年度研究プロジェクト（「心理臨床家をを目指す学生に対する教育訓練の効果と心理臨床家の発達に関する研究」）として行われた研究の一部である。

引用文献

- Baker, E. K. (2003). *Caring for ourselves: A therapist's guide to personal and professional well-being*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Barnett, M. (2007). What brings you here? An exploration of the unconscious motivations of those who choose to train and work as psychotherapists and counselors. *Psychodynamic Practice*, 13, 257-274.
- Beutler, L. E., Machado, P. P. P., & Neufeldt, S. A. (1994). Therapist variables. In A. E. Bergin & S. L. Garfield (Eds.), *Handbook of psychotherapy and behavior change* (4th ed.) (pp. 229-269). New York: Wiley.
- Corey, M. S., & Corey, G. (1998). *Becoming a helper* (3rd ed.). Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.
- 下山晴彦（監訳）（2004）：心理援助の専門職になるために：臨床心理士・カウンセラー・PSW を目指す人の基本テキスト 金剛出版
- Elliott, D. M., & Guy, J. D. (1993). Mental health professionals versus non-mental-health professionals: Childhood trauma and adult functioning. *Professional Psychology: Research and Practice*, 24, 83-90.
- Farber, B. A., Manevich, I., Metzger, J., & Saypol, E. (2005). Choosing psychotherapy as a career: Why did we cross that road? *Journal of Clinical Psychology*, 61, 1009-1031.
- Fussell, F. W., & Bonney, W. C. (1990). A comparative study of childhood experiences of psychotherapists and physicists: Implications for clinical practice. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 27, 505-512.
- Henry, W. E. (1966). Some observations on the lives of healers. *Human Development*, 29, 82-100.
- Hill, C. E., Thompson, B. J., & Williams, E. N. (1997). A guide to conducting consensual qualitative research. *The Counseling Psychologist*, 25, 517-572.
- Hogan, R. A. (1964). Issues and approaches in supervision. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 1, 139-141.
- 一丸藤太郎（編）（2002）. 私はなぜカウンセラーになったのか 創元社
- 金沢吉展・岩壁 茂（2006）. 心理臨床家の職業的発達に関する調査から：（１）臨床家としての自己評価に影響を与える要因について 日本心理臨床学会第 25 回大会発表論文集, 234.
- Murphy, R. A., & Halgin, R. P. (1995). Influences on the career choice of psychotherapists. *Professional Psychology: Research and Practice*, 26, 422-426.
- 日本心理臨床学会（2003）. 日本心理臨床学会会員名簿（2003 年度版）
- Norcross, J. C., & Guy, J. D. (1989). Ten therapists: The process of becoming and being. In W. Dryden & L. Spurling (Eds.), *On becoming a psychotherapist* (pp. 215-239). London: Routledge.
- Norcross, J. C., Hedges, M., & Castle, P. H. (2002). Psychologists conducting psychotherapy in 2001: A study of the Division 29 membership. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 39, 97-102.
- Norcross, J. C., Prochaska, J. O., & Farber, J. A. (1993). Psychologists conducting psychotherapy: New findings and historical comparisons on the Psychotherapy Division membership. *Psychotherapy: Theory,*

- Research, Practice, Training*, 30, 692-697.
- Orlinsky, D. E., Grawe, K., & Parks, B. K. (1994). Process and outcome in psychotherapy — Noch einmal. In A. E. Bergin & S. L. Garfield (Eds.), *Handbook of psychotherapy and behavior change* (4th ed.) (pp. 270-376). New York: Wiley.
- Orlinsky, D. E., Rønnestad, M. H., & Collaborative Research Network of the Society for Psychotherapy Research (2005). *How psychotherapists develop: A study of therapeutic work and professional growth*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 大山泰宏 (2010). 臨床心理士の動向ならびに意識調査から見えてくること (その 1) — 1995 年から 2007 年までのレビュー：全体的傾向一. 日本臨床心理士会雑誌, 67, 37-40.
- Racusin, G. R., Abramowitz, S. I., & Winter, W. D. (1981). Becoming a therapist: Family dynamics and career choice. *Professional Psychology*, 12, 271- 279.
- Skovholt, T. M., & Rønnestad, M. H. (1992). Themes in therapist and counselor development. *Journal of Counseling and Development*, 70, 505-515.
- Skovholt, T. M., & Rønnestad, M. H. (1995). *The evolving professional self: Stages and themes in therapist and counselor development*. Chichester, West Sussex, UK: Wiley.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage. 操華子・森岡崇 (訳) (2004). 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第 2 版) 医学書院
- Aronson.
- 上野まどか (2007). カウンセラー志望者の動機と実践で感じる困難との関係. 明治学院大学大学院心理学研究科修士論文
- 渡部瑞恵・東海林則子・椿堂由紀 (2001). 心理カウンセラーを志望する大学生のパーソナリティ特性の検討—援助規範意識との関連から—. 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 6, 15-23.

A Qualitative Study on Japanese Clinical Psychologists' Initial and Current Motivations to Engage in Clinical Work

Yoshinobu KANAZAWA

(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Shigeru IWAKABE

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)

Abstract

This study examined both initial and current motivations of Japanese clinical psychologists to be engaged in clinical work. One-hundred sixteen written responses to the question, "What motivations and considerations originally led you to become a therapist, and when did you think of becoming one?" as well as 115 responses to "What motivations are you aware of in your current therapeutic practice?" in the free-response portion of the Development of Psychotherapists Common Core Questionnaire-Japanese Version (DPCCQ-J) were analyzed using a qualitative method informed by grounded theory analysis and consensual qualitative research. Results indicated that willingness to help others was a primary initial motivation, followed by intellectual/vocational interest in psychology, psychotherapy, or mental processes. The primary current motivation also consisted of helping others, whereas 32.1% of the responses were related to the meaningfulness of clinical work for the respondents themselves. There were a fair number of psychologists who raised job-related and economic necessities as their initial and/or current motivations. Implications for training are discussed.

Key words : Professional development, Career and work motivation, Qualitative research